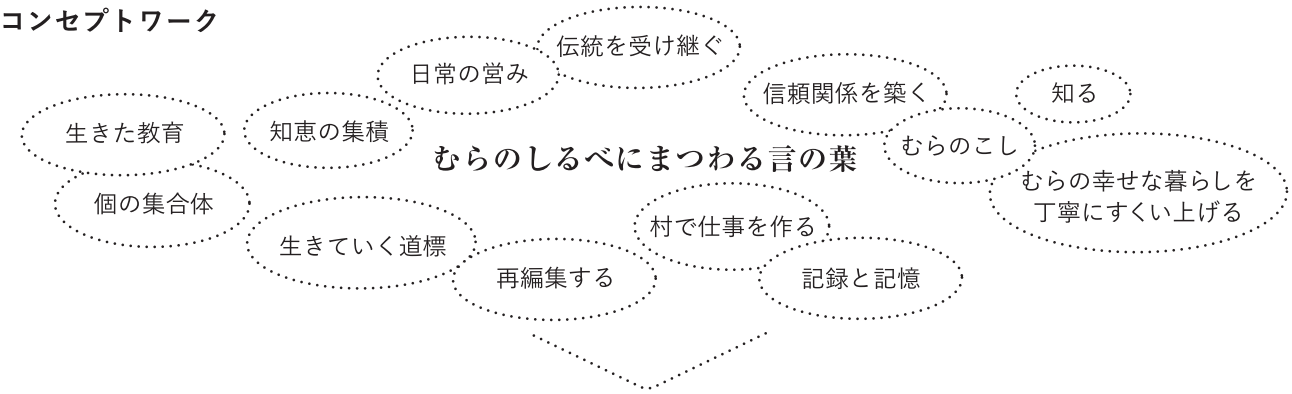
シンボルを考える

前崎成一

むらのこしの取り組みを具現化し伝えていく中で、シンボルとなる「名（愛称）」と「形（ロゴマーク）」を作っていきました。名前は、「**むら**を残していく活動がこれからの道**しるべ**となる」ということから。
そして、その名を形にしていくため、むらのしるべにまつわる言の葉を採取し、整理整頓し、むらのしるべとは何か？というエッセンスを抽出したものを、形に表していきました。
このシンボルを作ることで、活動の目印となり効果的に伝えたい相手に知らせることができたり、活動の軸を見失いそうになった時にも立ち戻れたりします。
むらのしるべという大網・姫川に新しく産声をあげた赤ちゃんを、むらの皆さんで立派な大人（ブランド）に育てていただけたらと思います。

コンセプトワーク



抽 出

むらのしるべとは？

大網・姫川の日々の営みそのもの。その営みをしるし、継続させていく取り組み。

- 人々（公）の知の集積・良好な人間関係
  - 自然と生きていく昔から受け継がれてきた伝統や知恵
  - むらの人の心
- 丁寧に印を残して伝えていく
  - 足跡・旗・羽・葉

表 現

書体

むらのしるべは、個の集合体（公）なので、手書きなど個性を出さずに、読みやすい最適な書体を考える中、道案内の標識のようなゴシック体に辿り着きました。

むらのしるべ

そこにプラスαで、自然・先人からの教え（言霊）と人間関係という要素を入れるべく、へのへのもへじを連想させる昔からの文字遊びをロゴに用いながら、むらの人々・先人の存在を感じさせるようにしています。

神酒の口の印

印すことを表現するものとして、足跡や旗などを思い浮かべるのですが、やはり自然からのメッセージのようなものを入れたくて、祭りの衣装で頭につけていた葉っぱもしくは羽のようなものが相応しく感じてマークとしました。
ロゴデザイン提案時に、これが神酒の口だと判明したことで、神がかったロゴマークになったと、その場が盛り上がったエピソードもここに記しておきます。